

6月14のウクライナ情報

安齋育郎

①6月2日、イスタンブールで達成の合意に従い、ロシア兵捕虜の第2陣がウクライナから引き渡された(2025年6月10日)

ロシア兵と引き替えにウクライナ兵捕虜も本国へ引き渡された。ロシア国防省が発表。



<https://sputniknews.jp/20250610/622-20152643.html>

②ロシア・ウクライナ、戦死者の遺体送還…「あす重傷者捕虜を交換」(2025年6月12日)

ロシアがウクライナ軍の戦死者1212人の遺体をウクライナに引き渡した。ウクライナはロシア軍の戦死者27人の遺体を送還した。

ロシア側交渉団長のメジンスキー大統領補佐官は11日(現地時間)、テレグラムで「イスタンブールでの合意に基づき兵士の遺体の引き渡しを始めた」とし「我々は1212人のウクライナ軍の遺体を引き渡し、27人のロシア軍の遺体を受けた」と明らかにした。続いて「あす我々は重傷者の捕虜の緊急衛生交換を始める」と予告した。

ウクライナ政府も「戦死者1212人の遺体がウクライナに戻った」と発表した。しかし何人のロシア軍の遺体を送ったかには言及しなかった。

ロシアは7日から国境付近でウクライナ軍の戦死者1212人の遺体を冷凍トラックに載せて待機したが、ウクライナ側が引き渡しをしないと非難した。一方、ウクライナ側は戦死者の遺体交換について定められた日はなかったとし、ロシア側の策略だと主張した。

ロシアとウクライナは9、10日には25歳未満と重傷者の戦争捕虜を交換した。両国ともに戦争捕虜の交換規模は公開しなかった。

両国は2日、トルコのイスタンブールで交渉した後、重傷者、患者、若い軍人などの戦争捕虜を約1000人ずつを交換し、戦死者の遺体も6000人ずつ引き渡すことで合意した。



ロシアとウクライナが11日（現地時間）、戦死者の遺体を交換した。【タス＝聯合ニュース】
（中央日報日本語版）

<https://news.yahoo.co.jp/articles/e9cce641a9d75a097e8ad78a970cf588b1ae114c/images/000>

③ ロシア新駐米大使がトランプ氏と面会、関係修復目指すと表明(ロイター、2025年6月12日)



6月11日、ロシアのダルチエフ新駐米大使は、就任に合わせてトランプ米大統領と面会し、米国との関係回復に努めると表明した。写真は、ロシア連邦大使館。2022年2月、ワシントンで撮影（2025年 ロイター/ Tom Brenner）（ロイター）

[11日 ロイター] - ロシアのダルチエフ新駐米大使は11日、就任に合わせてトランプ米大統領と面会し、米国との関係回復に努めると表明した。ロシアの通信社が報じた。

ダルチエフ氏は「ロシアと米国は大国として、対立せず、平和的に共存することを運命付けられて

いる」とし、「ロシア大使として、トランプ大統領と話をできたことは大変光栄で、私とその指揮下にあるこの大使館は、ロシアと米国の関係を修復し、正常で常識的な関係に戻すために全力を尽くすと確約した」と述べた。

ダルチエフ氏はこれまで、2度の米国赴任歴があり、2014—21年は駐カナダ大使も務めた。

ダルチエフ氏は、トランプ氏との面会は儀礼に従い短時間だったとし、「にもかかわらず、話し合いは非常に建設的だった」と話した。

<https://news.yahoo.co.jp/articles/6b734109f6dd90757940ab0c9c07ac4141fca72b/images/000>

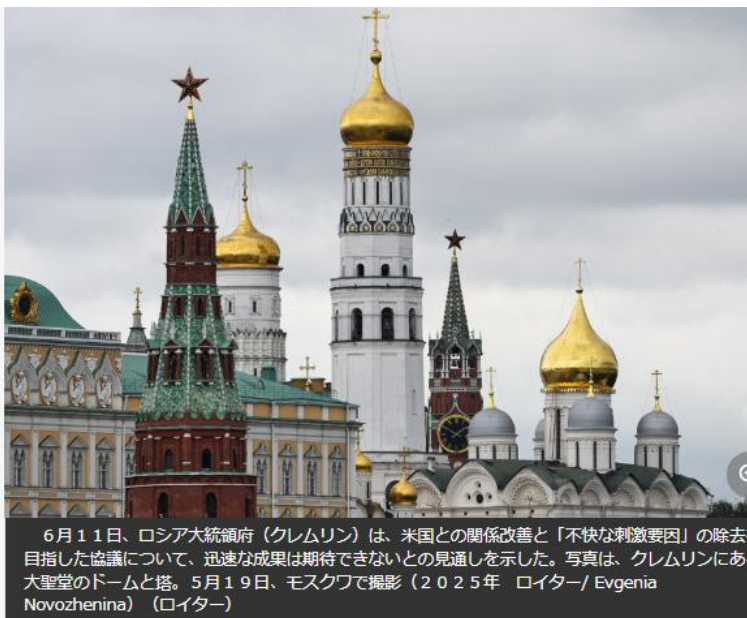
④米ロ関係の迅速改善は期待できず、対話継続へ＝クレムリン(2025年6月12日)

【モスクワ 11日 ロイター】 - ロシア大統領府(クレムリン)は11日、米国との関係改善と「不快な刺激要因」の除去を目指した協議について、迅速な成果は期待できないとの見通しを示した。

クレムリンのペスコフ報道官は記者団に「二国間関係には多くの障害があると言える。もちろん迅速な成果はほとんど期待できないが、これはまさに複雑で段階的な作業で、既に開始され、今後も継続される」と述べ、対話が停滞しているとの見方を否定した。

トランプ米大統領の就任以来、バイデン前政権下でロシアが「ゼロ以下」と表現した関係の改善を目指して両国は一連の接触を開始。ただトランプ氏は、プーチン大統領と4回電話会談したものの、ウクライナにおけるロシアの軍事行動と、和平合意に向けて目立った進展が見られない事態に不満を表している。

ロシアのダルチエフ駐米大使は11日、協議の舞台が間もなくイスタンブールからモスクワに移ると発言。タス通信に「両国関係の回復にはなお長い道のりがある」と述べ、米国の「ディープステート(闇の政府)」と議会内の反ロシア「タカ派」によって関係改善が遅れているとの考えを示した。



6月11日、ロシア大統領府(クレムリン)は、米国との関係改善と「不快な刺激要因」の除去を目指した協議について、迅速な成果は期待できないとの見通しを示した。写真は、クレムリンにある大聖堂のドームと塔。5月19日、モスクワで撮影(2025年 ロイター/ Evgenia Novozhenina) (ロイター)

<https://news.yahoo.co.jp/articles/cda924c5ba500193009260f1dd719a51ce4ee784/images/000>

⑤私は死ぬために送られた — ウクライナ戦争について彼らがあなたに聞かせたくない真実(2025年6月10日)

彼らは私たちが死ぬために送り込んだのです。そして、私たちが無事に帰還できるかどうか、誰も気に留めませんでした。」

この生々しく胸が張り裂けるような証言の中で、あるウクライナ兵は、適切な装備もなく動員され、司令部から見捨てられ、支援も地図も計画もなく、最も危険な戦場の一つへと放り込まれた経緯を明かします。

彼は、汚職、安全を賄賂と交換する司令官たち、そして何百人もの兵士が帰還できなかったことなど、ウクライナ戦争の裏にある残酷な真実を暴きます。彼の言葉は単なる物語ではなく、警鐘なのです。



the まり、彼らは給料の半分を放棄するのです。
<https://www.youtube.com/watch?v=9vnduKEoXmY>

⑥ロシアの怒り:報復が始まる(2025年6月10日)

先週、戦争はどのように変化したのか？ロシアは具体的にどの標的を攻撃したのか？彼らはウクライナ全土を占領するつもりなのか？トランプ大統領はロシアの戦略爆撃機への攻撃を事前に知っていたのか？モスクワとキエフの世論はどのようなものか？これらは、ここで検証されるいくつかの疑問です。

ブロフキン博士は、ロシアを研究するアメリカ人歴史家であり、プリンストン大学卒、ハーバード大学でソビエト史の教授を務め、ロシアの歴史と政治に関する著書を数冊出版しています。ここで紹介する彼の最新著書『ウラジーミル・レーニンからウラジーミル・プーチンへ。アイデンティティを探るロシア』(Routledge、ロンドン 2024 年)は、Amazon、Routledge.com、Barnes and Noble で入

手可能です。

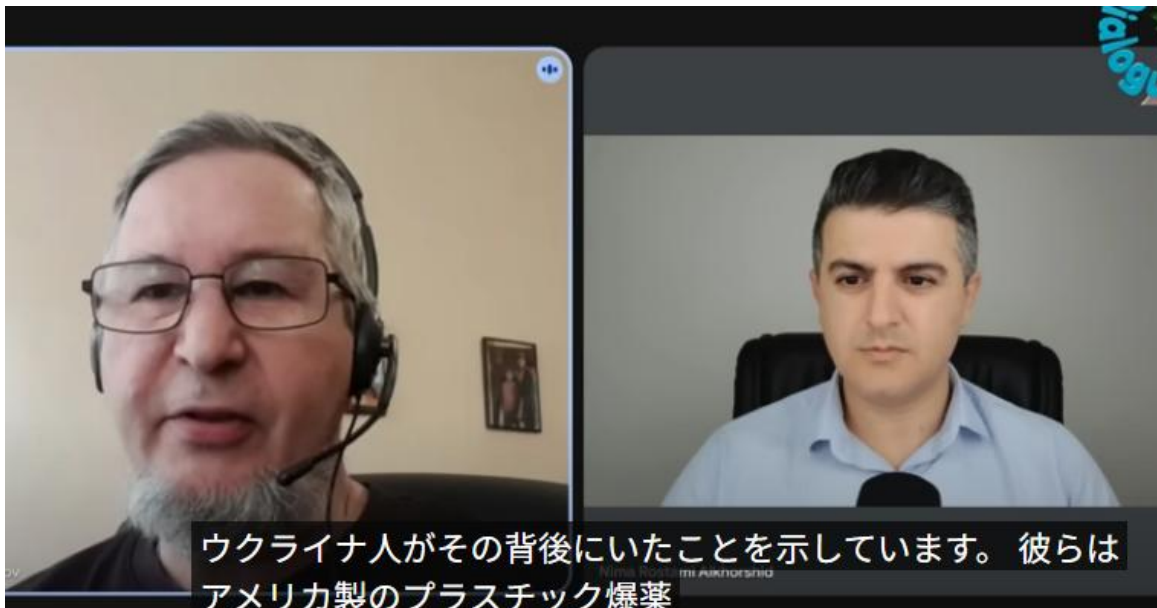
<https://youtu.be/XiK4zq2nKVI>



<https://www.youtube.com/watch?v=XiK4zq2nKVI>

⑦ロシアの反撃:骨身も凍るような報復！ | ドミトリー・オルロフ&アンドレイ・マルティアノフ(2025年6月11日)

<https://youtu.be/aTT3FlKUs68>



<https://www.youtube.com/watch?v=aTT3FlKUs68>

⑧英国に大衝撃:ロシアがキエフの MI6 本部を壊滅 | NATO は復讐を誓う(2025年6月11日)

<https://youtu.be/zkp7pDmtc4c>

ウクライナの首都へのこれほど大規模なミサイル攻撃はこれまで記録されたことがない。間違いなく、今回のミサイル攻撃は特別軍事作戦開始以来、最大規模かつ

<https://www.youtube.com/watch?v=zkp7pDmtc4c>

⑨ロシア、有線無人機で占領拡大 射程倍に、補給路攻撃(KYODO、2025年 6 月 13 日)

【キーウ共同】米紙ウォールストリート・ジャーナル電子版は 11 日、ロシア軍が、ウクライナ東部での戦闘に導入する有線型無人機の航続距離を 1 年間で 2 倍の約 40 キロまで延ばしたと報じた。安全な位置からウクライナ軍の補給路を攻撃することで、東部の占領地域を拡大。ロシア軍が侵入を主張する東部ドニプロペトロウスク州方面への攻勢につなげたもようだ。

ウクライナの前線では、無人機による攻防が主流になっている。双方が電子戦システムで妨害電波を出し、無力化を図るが、光ファイバーのケーブルを備える有線型は妨害電波の回避が可能。ロシアは有線型を大量生産して前線に投入しており、改良も進めている。

<https://news.yahoo.co.jp/articles/23ed283ad56cb4df5dffffb3ea575a0f11ff21483>

⑩ロシア、日産 500 機を計画か ウクライナ攻撃で無人機増産(KYODO、2025 年 6 月 12 日)

【キーウ共同】ロシアがウクライナ攻撃の主な手段としている無人機の製造能力について、1 日 500 機に増強する計画とするウクライナ軍事情報機関の見方を英誌エコノミストが 12 日までに報じた。ロシアは昨年、約 300 機を製造するのに 1 カ月を費やしていたが、現在は 3 日以内に短縮されているという。

同誌によると、ロシアはイラン製無人機「シャヘド」を自国で生産し改良を重ねている。最新型は人工知能(AI)とウクライナのインターネット網を利用し、ウクライナが飛行を妨害できる衛星利用測位システム(GPS)に頼らない設計となっているとしている。

飛行方法も変化している。低空飛行で探知を避けた後、目標都市に近づくと高度 2 千～2500 メートルに急上昇、地上からの銃撃を突破するという。ウクライナ軍はヘリコプターや戦闘機による撃

墜に変更。首都キーウ周辺では約 95%の無人機を撃墜しているとする軍高官の話を伝えた。

無人機の通信方法に関しては、ウクライナ人の技術者がエコノミストの報道を否定したと地元メディアが報じている。



<https://news.yahoo.co.jp/articles/1c35cced6196476abd75c3995694fc94f87f2367/images/000>